

「今、私の晴雨計は！68」

「鷗外が歩んだ二つの人生」

平山 征夫

実家を畳んだ話を前回書いたが、実家に残っていた写真は詳細に見ていなかった。気になったので段ボール箱を開けて見てびっくりした。台紙に張られたA4位のもの三枚の写真には「昭和19年7月21日、柳橋の大水の様子」とあったのだ。それは、私が生まれた日の町内の写真だ。私が生まれた日、「裏の鵜川が氾濫してボートで産婆さんを迎えに行った」と何度も親父が話していたので、私が生まれた日が大水だったことは知っていたが、まさかその日の町内の写真を見るとは思っ

いなかった。消防の人と住民だろうか、膝上まで水に浸かった人々が慌しそうにしている。まだ戦争中だったので、「男手はが足りなかったろう・・・」など思いながらしばし見入った。何年か前、市が行った昔の街の様子を集めた写真展に出されたもので、終了後妹が「兄の生まれた日の写真ですの：」と言って貰って来て呉れたものだった。

新潟国際情報大学では市内中心にあるキャンパス(主要キャンパスは郊外)で、市民などを対象に一般教養、語学、資格などの講座を広く実施している。大学の地域貢献として学長時代力を入れた事業で、私も経済、財政、地方行政、街づくりなどのテーマ

で数年前から講座を担当してきた。ところがテーマが段々品切れになってきたこともり、今期は何をテーマにしようか迷った挙句が、思い切っ前からうやりたかった「鷗外」の講座を開くことにした。知事時代新潟で開かれた「全国啄木学会」がきっかけで始めた鷗外研究を「二つの人生を歩んだ鷗外―その栄光と苦悩」と題する4回の講座にしようと考えた。素人としてはかなり乱暴な挑戦だったが、自分の鷗外観を話してみたかったし、明治という近代化への激動の時代を国家と家、更には自我の間で葛藤しながら生きた一人の知識人の苦悩を知って貰いたかったからだ。悪戦苦闘の末何とか先月末講義を終えた。

松本清張が最後に書いた「両像論」は、鷗外の二重人格性を書いたものだが、陸軍軍医と文学者の二つの人生を送った鷗外には、その人生において幾つか矛盾する行動が見られる。そうした行動を中心に①同じ留学生で親友の画家原田直次郎にドイツの女性と付き合うなら真面目にと説教していた鷗外が、何故帰国時に追いかけてきたエリーゼを追い返したのか(舞姫事件)、②山県有朋のひきで軍医総監への道をひた走った鷗外、山県の思想取締に関する秘密会のアドバイザーとして無政府主義等の取り締まりを肯定しながら、大逆事件後にはそれを批判する小説をいくつも書いたのは何故か、③日本の近代化の

先兵としてドイツに留学、西洋文化の移入にも貢献していた鷗外が明治の終焉と同時に歴史小説に転換したのは何故か、④臨終の床に無二の親友賀古鶴所を呼んで遺書を口述筆記させたが「墓には中村不折に頼んで森林太郎とのみ記せ。他の肩書等は一切記すな」と言明したのは何故か、などを柱にその作品の紹介や他の文学者との交流など交えて講義した。この中で舞姫事件に関連して登場する鬮字の上司・石黒忠恵とエリーゼの説得に当たった妹の旦那小金井良精、大逆事件で啄木とは明星の歌人仲間で弁護士を務めた平出修は本県出身者でもあり、もっと知ってもらいたいとの思いで力が入った。殊に石黒に

ついては、鷗外の敵役的存在だったため悪役イメージが強く、日赤や茶道での貢献などは勿論、人物自体正当な評価をされていないし、小金井も解剖学の父で、アイヌ人の人骨を研究したことなどで評価はされているが、鷗外との関係、とくに、舞姫事件での役割などあまり論じられてこなかった。近年読めるようになった彼の日記から窺うと、多くの男がそうであるように妻喜美子に言われて母親峰子の意向であるエリーゼ追い返しに動いていたようだ。平出修は、大逆事件での見事な弁論は、幸徳秋水、菅野須賀子からも賞賛されており、明治三大弁護士の一と評価されているが、文学面での評価は殆どない。明星廃

刊後「スバル」を啄木と主宰し、鬮字に執筆の主要な場を提供していたうえ、自らも「逆徒」始め大逆事件に題材をとった優れた小説を残している。修のことは息子さん、お孫さんが「平出修研究会」で残された資料の研究も含め顕彰作業を続けてこられたが、近年会員の高齢化が進み継続の心配をしている。

起こった鬮字のエリーゼとの確執の真相が見えてきたのだ。鬮字の帰国と同時に母親峰子は親戚西周の紹介で海軍中将赤松則良の娘登志子との結婚話を進める一方、母親の意向を受けた良精によるエリーゼ説得が行われた。この間の鬮字の優柔不断はエリーゼの怒りを買ひ、鷗外は一時は陸軍辞職を決意し石黒に申し出たが、この結婚が歓迎されていないことを悟ったエリーゼが諦めて帰国決意をしたことで、辞職は取り下げられ落着いたというのが真相として垣間見える。鷗外没後10年余の沈黙の後、子供たちが父の思い出を出版、その中で「父が一番愛していたのはエリーゼだった」「その後も二人は長い間

文通していた」「父は亡くなる少し前、母（再婚したしげ）にエリーゼの手紙や写真を庭で焼かせたそう」などの証言が一挙に出てきたが、妹喜美子はその著作の中で自身が目撃したエリーゼ像を記すことで一挙にこれらを打消したため、近年まで鬺字の本当の気持ちを含めて真実は封印されてきた。この事件から22年後、鷗外は、あたかもその言い訳のよいうな「普請中」という短編を書いている。久しぶりに再会した外国婦人と日本の軍人が築地精養軒で会食するのだが、かっつての恋愛を回顧する婦人に軍人は「このホテル同様日本は普請中だから」と言い訳する。当時の軍人の国際結婚には、政府の許可が必要だった。

この小説を読んで以来、「鷗外は本当はエリーゼと一緒になりたかったのだ」と感じていた私としては、近年の研究はそれを納得させるものだった。この研究成果の中心は、林尚孝氏と小平克氏の諏訪青陵高の先輩後輩コンビによるところが大きい。小平氏のそもそもの研究は、難解で有名な鬺外の「我百首」が後年舞姫事件を思い出して鷗外が自分の想いを一挙に歌にしたものだということにあつた。

鬺字の「我百首」は明治42年スバル5号に掲載されたものだが、スバル発刊時から同人10人による我百首の企画はあつたが、実際に寄せたのは鬺字のほかは与謝野鉄幹と晶子だけだった。木

下柰太郎が「テーベの百門」と称したように小説だけでなく歌、漢詩、戯曲、翻訳、評論など幅広い分野で文学活動した鬺字の作品の中で短歌はそれほど注目されてこなかった。だから小平氏の解釈もこれから多くの人によって議論されるだろう。その研究の副産物のように舞姫研究が進んだのは鷗外を齧っている私らにとっては喜ばしいことだった。講座を振り返ってふと思いついたことがある。それは鬺字の漢詩だ。明治の二大文豪鷗外と漱石には二〇〇を超える漢詩が残されているが、双方ともあまり研究されていない。10年くらい前、中国人の研究者が鬺字の漢詩の解説書を出版したのを購入したが、そ

のまま。いずれ、鷗外と漱石の漢詩を比較研究したいと考えたことを思い出した。良寛を齧った際思っただが、短歌はその人の情感を、漢詩はその人の哲学を一番よく表す。だから「一度漢詩を研究してみるべきだ」と思ったのだ。併せて、「研究し尽くされている良寛は漢詩も同様なので、山頭火など他の放浪の歌人と比較してみようか」と思ったりした。どちらにしてもこんなことを考えているのが楽しいのだ。寿命は多分そんなにないのに……。

（令和二年三月二日）

追記…次の鷗外のカリカチュアは、「スバル」の創刊号の裏表紙に掲載されたもので、上から当時

の巨匠和田栄作、鹿子木猛郎、浅井忠、中村不折が描いたものの筆者模写。一番下も筆者愚作。

